



Lecture series

<第10回>

「生循環モデル」の構築を目指して

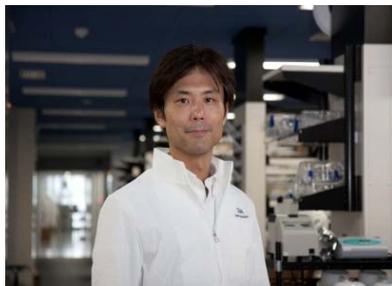
平成27年 10月 19日(月) 15:00～16:30

京都大学附属図書館 1階
ラーニング・コモンズ

(京都大学の学部生・院生対象)

齊藤 博英 氏

(京都大学iPS細胞研究所
未来生命科学開拓部門 教授)



中西 竜也 氏

(京都大学白眉センター 特定助教)



西村 周浩 氏

(京都大学白眉センター 特定助教)



問合せ先：京都大学附属図書館 参考調査掛
TEL：075-753-2636
e-mail：ref660@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

今回のテーマ

現在の生命科学の進歩には目覚ましいものがあります。しかし、生命がもっていた神秘のベールがはぎとられていく中で、我々が生命に対して抱いていた畏怖の念は相対的に低下していないでしょうか？ そして、生命とは何か、という本質的な問題に私たちは真摯に向き合っているのでしょうか？

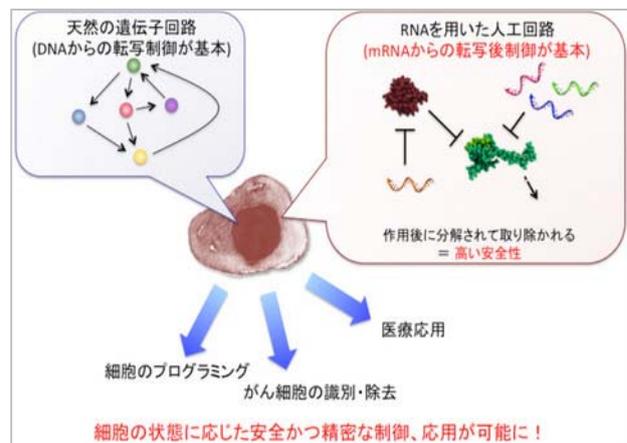
かつて人々の生命観は、生命それ自体の起源や仕組みにとどまらず、宇宙の構造や世界と人間との関係性、それを踏まえた上で探求される人間のあるべき姿、といった問題と密接に結びついていました。さらに、社会秩序の維持という局面においても重要な働きをなし、国家や社会運営にも影響を及ぼしていました。今の生命理解からすれば「非科学的」な部分があるにせよ、はるかに包括的だったと言えます。ひるがえって、現代の生命観にそれだけの奥行きが保持されているのでしょうか？ おそらく、人文・社会科学諸分野による「いのち」の多角的探求と、生命科学の最先端の研究とが結びつくことで、「生命研究」の再構築への扉が開かれるのではないのでしょうか。



Falerii Novi(イタリア中部)の横穴式墓地の入り口



中国のモスク



RNAを用いた人工回路のヒト細胞内での構築

齊藤博英（さいとう ひろひで）：だんじり祭りで有名な大阪岸和田高校出身です。宇宙物理学を志して東京大学に入学するも、生物の授業で利根川進博士のビデオを見て分子生物学という世界を知り、生命の起源に興味を持ち始めました。その後、生命の起源における「RNAワールド仮説」の実験的検証をおこないました。現在、iPS細胞研究所未来生命科学開拓部門に所属しています。細胞機能を自在に制御する新たな技術開発に取り組むことで、生命システムの構築原理に迫ることを目指しています。

中西竜也（なかにし たつや）：滋賀県生まれ。高校の頃は陳舜臣さんの小説を通じて中国史に憧れていましたが、神戸大学に入学後、指導教員の影響でイスラームにも興味を覚え、結果、中国イスラーム史を研究することになりました。修士から京都大学に移り、現在は白眉センターに所属しています。17世紀から現在にいたるまで、中国ムスリムがいかにしてイスラームを中国的環境に適応させてきたかに関心があり、漢語やアラビア語、ペルシア語、トルコ語の文献研究に取り組んでいます。

西村周浩（にしむら かねひろ）：広島生まれ。文学研究を志して慶応義塾大学の仏文科に入りましたが、二年次に印欧比較言語学に出会い、関心が言語学へ。修士課程から京都大学に移り、博士課程の途中でUCLAへ。苦労の連続でしたが、よき指導者に恵まれ、無事修了することができました。ラテン語をはじめとする古代イタリアの諸言語が研究に中心であるため、フィレンツェにも一年留学。イタリア人の美意識の高さに感動。現在は白眉センター所属。言語を通して浮かび上がる精神文化にも関心が広がっています。